



燕石襍志

易武

15
1492
2



門 495
號 1492
卷 2

夷石雜志卷之二

鑾室軒

龍澤 漢吉述



① 古歌の訛

新纂陶集といふ所の小倉坂張範盜賊の事、高野山に登りて

の外に、櫻がゆかりのいささか、覺えられ、後世の事、さうさう、

いささか骨堂へ投入せし一首、御まごころん

高野山麓の櫻、いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、

いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、

いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、

いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、

いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、いささか、

高野山麓の櫻、いささか、いささか、いささか、いささか、

早稲田大学図書館
35.2.1
漢書

あつたてど人よままとまふりりたれりなりうめどこの今めをを
せくまてりとのとらんをみりりる曲草子云婦の嫉妬たるを
拙を掩ふとりの二歌ともめり情ふじ或の夜あささとの男のあ
らちをばうしちをさるらんめをさひ或の髪を鬪う後妻とまじ
をも嫉中へ僅よこひとめをさつらねをこころをさつらそのらや
ちつをさるしちをいしく育ぐさるべし世俗只伊勢物語のそをそと
大和物語も又ゆる貞女の歌ふみさるあををさるふりて今一番の
都合しとるりの大和物語女部花物語ホよりの二歌をさるふあをせり
わさへん樂くいんちん哀さく傷らびとるあをさるふりて
四 水
夫本集第九六雜部八俊頼朝臣のう
俊頼朝臣のう

の遊あとりりの實の水よあを春の曠野よとらぐりのをを
まうれい水の流る如くよあををさるふりてとるあをのう野馬陽を
をさるふりてとるあをのう根く所ありたよ紗を
性一靈集蘇陽歌喻 見下卷十
運々春日風光動陽穀紛々曠野飛舉體空々無
所有狂兒迷渴遂忘歸遠而似水近無物走馬流
川竹處依運版註智論曰飢渴心極見熱氣
野馬謂之為水疾走趣之轉近轉滅走馬流川
謂陽空狀貌也
遊水のうらなみさる審あり俊頼の空海のうらなみさる

⑤ 一 一の橋
其角が五え集え鮮くは花葉向きうらうらく俳諧者流るれを往

亦珍るト集也

窓銭のうたせをさるる人雪見り也

其意

或説よりこれの時よりありやん窓一は身月二百支の裸役をあり

とてさるりこれを窓銭といふ其角がうたせをさるる人雪見り也

これとさるりこの窓銭のさるる人雪見り也

所見りやそのありともさるる月えともさるる北窓閉るといふ

十月の刻て冬の窓を閉る隙りの風を感するさるる人雪見り也

此物按どる窓銭の房銭を揚り致其角が録草より假字よりヤド

銭と書するやをマカ帳に真名と窓と書し印行してさるる人雪見り也

さるる後人強さるるを註せんとて其物首の鏡をさるる人雪見り也

紀一頁曰放房銭宋朝會要曰大中祥符五年正月以

雪寒應店宅務賃屋者免儗錢三日此雨雪免房錢

之始也七年二月詔貧民住官舍者遇冬至寒食

儗一直三日此節日放免之始也其角のこの故事をさるる人

雪をさるる人雪見り也

此賃銭のさるる人雪見り也

務賃屋のさるる人雪見り也

りといふ降る雪をさるる人雪見り也

七夕

之縁六年六月廿八日其角が二團の神社祈雨の獲り世奉り人のさる

ところ其角が自筆の短冊并より五集のさるる人雪見り也

名を書しりりり世の人をさるる人雪見り也

たさるる回をみめぐるの神をさるる人雪見り也

難いことさるる人雪見り也

大人の稱呼先生は優ると遠く亦按ざるは皇胤紹運録に武内宿禰の
孫平輝真鳥の子の紀大人といふ人えたり亦平治物語源平盛衰記亦
子帯刀先生義賢あり併らるる存と職の喩のそらより大人之生
と同一く大人をいふと統とる日本紀よりえたり

○按神記云舊歳太右之時有大一人遠征家無餘一人
唯有一女牡馬一匹女親娘之亦是大人謂有威
權者也見于卷十四

十 降教吉凶 五報 夢寐

賢者之言曰禍福將至善必先知之不善必先知之
故至誠如神信哉此言也氣之動物物之感人搖傷
性情形諸舞踊照燭ニ才輝麗萬有靈祇待之以致
警幽禍福不招而求謂之天吉凶不求而得謂之命

或謂吉凶前定或謂禍福無門夫命運非人所能也
而人能致之致之味悟身枯人始悟不亦遲乎

○本一事詩曰劉希夷嘗為詩曰今年花落顏色改明年
花開復誰在忽然悟曰其不祥歟復遺思逾時又曰
身一年歲歲花相似似歲歲年年人不同又惡之或解之

曰行必其然遂兩留之果以未春之初下世
○空進士作明堂火珠詩贖帳曰夜來雙月滿曙後
一星孤時以為警告及未年曙卒一女名星星人始
悟其自識也 共載于廣百川 傳子後

○教をいふこととあはれとあるものありけりあやうきものがせうといふものあり
さうなるをいふものありさうなるも速懷也といふものありけり
さうなるをいふものありさうなるものありけり

九月十三日止之日七魄散ぶるが故なり散トく後亦聚るとす一燈言の春の
氷の解るがごとくその解んとするに氷は砕け氷は氷上は浮ゆがりの人死
まるといふもその魂魄の散ぶるが如く氷解く氷は帰る魄散と
氷は帰る魄散の砕ける氷の氷上は浮の類とあれば鬼神の威嚇とされ
あり竟鬼の魂廻るがごとく人をむすむめし竹の院の僧一僧極店より
ゆりたる易経を購ひしときよゆりし披閱するに未をりしことを
経よりその經一もとるべしなり僧堂を指す大よあざと笑ふ後よその
夜徹頭よ發熱既痛し病と五六日ほど死んと人又某の坊に儒者
あり一夕その門人某生忽然と死すもれに儒生これをもんすゆめ
怪むるのりぬる月黄泉の客とありたるよありぬ本と問が門人のん
まるといふゆりし今何の故ありてありの語をせらんと訝むる門人
らら微笑しし易経注せんらるる易経注せんらるる易経注せんらるる

このいごせとてたあつるよ死後りて日もあるが妻のりたるさんまの
野老の書籍を賣つた易の坊の年某のれりりあればいごせ
し思ひはるよ某の院の僧極店より彼易経を購ひししを鏡一也
とるたりのいごせとてたあつるよ死後りて日もあるが妻のりたるさんまの
五六日ほど死るといふが故なり散トく後亦聚るとす一燈言の春の
氷の解るがごとくその解んとするに氷は砕け氷は氷上は浮ゆがりの人死
まるといふもその魂魄の散ぶるが如く氷解く氷は帰る魄散と
氷は帰る魄散の砕ける氷の氷上は浮の類とあれば鬼神の威嚇とされ
あり竟鬼の魂廻るがごとく人をむすむめし竹の院の僧一僧極店より
ゆりたる易経を購ひしときよゆりし披閱するに未をりしことを
経よりその經一もとるべしなり僧堂を指す大よあざと笑ふ後よその
夜徹頭よ發熱既痛し病と五六日ほど死んと人又某の坊に儒者
あり一夕その門人某生忽然と死すもれに儒生これをもんすゆめ
怪むるのりぬる月黄泉の客とありたるよありぬ本と問が門人のん
まるといふゆりし今何の故ありてありの語をせらんと訝むる門人
らら微笑しし易経注せんらるる易経注せんらるる易経注せんらるる

もさうりしとぞある人むら目録ありとて予もあつりた亦
あれの時あれの里や忘れよとて市人の妻とあつりて生りた
産後遂に肥えどとて身よりねその死んとてとらぬよのま
乳母とて家より養育しぬ里親とてのみのまを托遣しぬと
遺言ありりれと原末富もあつねば乳母を頼んずりて里子と
りりの遺言とて宿に寝て里親との見を送りてりてあつる
と二度もあつりて怪とていりりあつるをりてあつる
因に里親とての児を昼より移りゆれと夜に通宵後と嘆よ及べ
そその啼とて誰とあつりて外面は女の声とて児の息を吸ひぬ
ゆい性、たりのあつるふりてあつるをりてあつるをりてあつる
悟りてあつり悲とてあつる人の乳をりてあつるをりてあつる
あつるあつりてあつるをりてあつるをりてあつるをりてあつる

らんわれ世に冤鬼なるいづれ或の書籍を愛惜し或のよの愛
着しとて魂魄の中を散滅せぬ人觸る声と形とあつるが如くあつりとも
魂魄久しく凝滞するあつるをりて後遂に怪とて冤鬼と臨
終の餘煙ありとてあつるをりて冤鬼とあつるのよのあつる王亮が論に鬼の
人死るとあつるのよのあつるをりて不可とて伝者の説に鬼へ人死るとあつるの
よのあつる不可とて鬼神とてツあり天地ありて陰陽とての萬物よこれ
を死生とてのあつるをりてその気散るを冤鬼とて陰陽凝滞しと傾か
らざるを冤鬼とての孔子曰。鬼神之為徳。其盛矣乎。視之
而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人。齋
明盛服。以兼祭。紀洋洋乎。如在。其上。如在。其左。右。將
云。神之格思。不可度思。矧可射思。朱註程子曰。鬼神、
天一地之功用。而造化之迹也。張子曰。鬼神者、
氣

能也。朱子謂以二氣言則鬼者陰之靈也。神者陽之靈也。以一氣言則至而伸者為神。反而歸者為鬼。其實一物而已。亦曰鬼神無形與聲。然物之終始莫非陰陽合散之所為。是其為物之體而物之所不能遺也。とつり聖人鬼神の徳を稱して其上に在り如く其左右に在り如くその實はその上にありその左右に在り如くこれを祭祀とて在り如く人の寛鬼疫鬼をうつるも亦如く如くその氣を觸ると其の眼前に在り如く水火の意秘あり如くとも人の火の燃泉の流るるをさるる風雷も亦如く一とられとも人の烈雷鳴ると其の声を聞寛鬼の鏡証をさるる如く一とられとも人の善あるべ天堂は生し悪あるべ地獄は墮るる如くこれを識鬼といふ如く若鉄云。孫愾云。餓鬼鬼也。餓五箇。反刻。與飢同。久飢也。内典云。餓鬼其喉如針。不得飲水。

見水則變成火。とつり飢渴の人の憎む不ちを如く餓鬼といふ如く善悪の氣の主とるとつり善をを神とて悪をを鬼といふ亦これ故あり俱舎論頌に鬼以尾為目。以五百人一間。一月為一日。而壽五百歲。とつり蛇足の辨のまその妄るとを甚し雲霧風雷水火鬼神の画者悉くこれを画するもの雲霧風雷水火の如く其れを如くをを如く妄るとつり鬼神に至る妄るとつり實はその如くありとつり左平記の載。天智天皇の御座お孫原子方との如くありとつり金鬼風鬼水鬼隱形鬼といふ四つの鬼を使ひたり好賀好夢の兩國これかろよ妨られし王化は頼みありの如く一紀朝雄といふの宣言を其れとつり彼國より一首の歌を録し鬼中へを送りたるの如く。草も亦も我大君の國ありけり。鬼の栖るるは四つの鬼との如くをえり。忽ち口より去りて失より其の午方勢を失ひて朝雄

か討られしとつり是れその鬼とゆふの狐狸妖術の燃と大を鬼大と
いひ狐狸の假鬼あり亦鬼大の気大よきりれが自心の夜にありの
るればとつり大を鬼大とのみ致式の坂上田村磨勅を奉り鈴鹿
山に鬼を討とりありのよき毒あり劍の巻も亦云美田源次綱頼光家
宝の美劍を帶り夜一線大宮へ使へ反橋は干す鬼の身を切らる
より頼光その劍を鬼切と名づくとのみ或は反橋を羅織門を
のりて世よりの所部晴明識神を使役し後その鬼を一線反橋の
上討り源頼光朝臣勅を奉り大江山に悪鬼を討ホの致あり夫
鬼神の形あり形ありれが竹を討竹を斬竹を復せん鬼と入て
同しやぐ縦透歌を詠りられし贈りとも解とべれその俗人より詩
歌をぞくし鬼も亦決り詩歌を感ぜるとおほくしこれを感ず
るりの悪鬼よめく悪鬼よめく人の民を残害んをぞくし詩品

云。微藉之以昭告動天地鬼神莫近於詩貫之在
今序亦云らるるもいふとてあめつらをうごけのよみえぬがよ
神をいふそれと母の世をとと女のうをまかすぐらりれりのぬのむ
をもちぐさむりの歌あり云これ詩歌の徳を美さるるその實よ
過り天に左旋し月日に右旋しとのみりのみ理のよその動くマ動ぶ
るや人のそれとてあるあやめく人の地上よをりくたぬくその地震
をあるまれども人よりこれを動せよあやめく天地の固く動せなるら
るり鬼神を感ぜめんり詩歌をりて天地を動り鬼神を感ぜり
ひるあやめ葉が真龍を憎むる等しく世人あやめく佳句秀歌を
憎まん曩よある人ありのあり 歌よめくやととられ天地のう
らめくくくたつるりのみ千右の人りせよあやめくあやめくあやめく
絶倒とべり亦彼頼光朝臣綱よ命とる羅織門よ建る所の標示今

勅諭

羅道司處

港運治務

元年

六月三日

按律海關

る不京師ある其の家系と云ふ予近々その徴を摸したる墨本一
幅を以てしつゝこれを見れば疑ひなきやうにわあどその徴半折
るその文全くうざれども変化退治の告文といふと不審古き暮録也
と往昔の妖賊を鬼とて変化ともいふるべし世俗らるるを百鬼の鬼
を主とすめたる物の醜惡強大なるものをとて鬼といふられ
本邦の古實秋草花に鬼百合鬼薊あり酒煙草蕃椒に鬼とらるゝの
名あり馬に鬼鹿をあり剣に鬼切鬼丸あり軍書に鬼神と呼ばるる某生
を討つらぬと軍陣に自誇する処あるをいふも朝雄頼光の退治あり
其の鬼ありざるを知らん鬼切鬼丸の剣も亦あるを鬼を切らぬ名
はつたるありあはれ鬼百合鬼薊より鬼の如く後人附會の説をさす
の羅生門に拾枚抄に羅生門の鬼
とあり今人の羅生門と書しこれをらるるうらんと誇りたるうらむのうらむを

唱ふべしや小世強物格宇治拾遺物語ホム 柏原の御時らるる
高元をこらとせらるるとありらるるうらんの僻説あるべしされば昔好か徒然
草に載たりし伊勢國の鬼の今當時のうらんをいふのを眼病いへるも
のありとむあつと鬼といふのべし亦按ずるも神代紀に大神軒遇突智
の生るる至るる其母伊勢冊尊息とて化去ありあり伊勢議事
黄泉入るる其母結ありあはれ膿涕虫流るるをいふる急ぎまき廻る
あはれ伊勢冊尊恨るる泉津醜女八人を遣はるる追留んらるるあはれと
ありこれ陰陽相列るるの多致醜女の鬼女なり今世に大坪の脚小鬼
面あるものをあつと大坪といふあつと醜女をいふとめと通じ日本紀の
説に伊勢冊尊を陰とて伊勢議事を陽とて又伊勢冊尊を鬼とて伊
勢議事を神とてとらるる伊勢の事と信ス鬼神の陰陽死生の事と

○頼光の四天王ホムるる古今著聞集今昔物語ホムるるえんたれと平

